



Data

監督・製作・プロデューサー・編集・
 脚本：片山慎三
 出演：松浦祐也／和田光沙／北山雅
 康／中村祐太郎／岩谷健司
 ／時任亜弓／ナガセケイ／
 松澤匠／芹澤興人／荒木次
 元／杉本安生／風祭ゆき

👁️👁️ みどころ

近時の邦画は、最大公約数の安定を狙った“説明調”のものが多く私の大の不満。そんな中、韓国のポン・ジュノ監督の薫陶を受けた片山慎三監督の長編デビュー作が邦画界に風穴を！

右足をひきずる兄は、知的障碍の妹と二人暮らしだが、リストラ後1枚1円の内職では食えないため、妹に売春を！こうなると、韓国の“あの名作”を彷彿とさせるが、本作はどこか牧歌的だし、売春から恋が生まれるような雰囲気も・・・？

そんなバカな！妊娠騒動は想定内だが、冷たい墮胎手術を終えた絶望の中、携帯にかかってきたのは誰から？ひょっとして・・・？もしそうなら、そこに一条の希望が！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■片山慎三監督の挑戦に拍手！邦画界に風穴を！■□■

助監督を10年続け、「そろそろ長篇も撮らねば・・・」と考えていた、1981年生まれ
 の片山慎三監督の長編デビュー作は「不意打ちの大傑作」で、「すべての日本映画がぶっ
 こわれてしまうかもしれない。」らしい。これは、『キネマ旬報』2019年3月下旬号で
 片山慎三監督をインタビューした森直人氏が提供したコメントだ(143頁)。そこには、さ
 らに「現代日本の澁みを全部盛りにしながら、端正に研ぎ澄まされた抜群のセンス。確かな
 力量と妥協なき粘り。何者だ、片山慎三！」「この稿を読む前に、できれば実際に作品を観
 て欲しい。なんでこんな凄い映画が生まれちゃったのか!？」ともあるから、とにかくベ
 タ褒めだ。

2016年2月からの撮影開始で、脚本と編集も自身で行い、2年以上かけて完成させた本作は、まさに彼の精魂を傾けたもの。また、そのインタビューで彼は、①製作委員会の都合で全員の意見を聞いているとチグハグになるので、余計な人を排除して自分たちの力だけでやろうとの思いで作った。②自費の持ち出しで本当にベストの選択で固めようと、クラウドファンディングもやめた。旨を語っているから、まさに本作は、彼が自分の思う通りに作ったものだ。製作費は300万円の『カメ止め』こと『カメラを止めるな』(17年)『シネマ42』17頁)よりは多いとは思いますが、ギリギリの予算内で作ったことはまちがいない。さあ、そんな今の邦画界に風穴を開ける本作の問題提起は如何に……?

■●ポン・ジュノ風?キム・ギドク風?パク・チャヌク風?■●

本作冒頭、携帯を片手に悪い右足を引きずりながら、懸命に妹の真理子(和田光沙)を捜し回る兄、良夫(松浦祐也)の姿が登場する。この俳優の顔は初めて見る顔だが、この冒頭のシークエンスの撮り方や音楽の使い方を見るだけで、本作は近時の東宝や松竹、東映のオーソドックスな撮り方とは全く違うことがよくわかる。敢えていえば、韓国のポン・ジュノ風?キム・ギドク風?パク・チャヌク風?実は片山監督はポン・ジュノ監督の助監督だったというから、必然的に韓国映画の濃厚かつ強烈なテイストがスクリーン上に出てしまうのかも……?

他方、妹の真理子は、どうやら重度の知的障害者らしい。やっと捜し当てた真理子はその日、無邪気に風呂に入って長い髪を洗っていたが、良夫は真理子のポケットから1万円札を発見!これは何だ?さらに、妹の下着を調べると、そこには明らかに……。すると、親切に妹を車で送り届けてくれたあの男と妹は……。?イ・チャンドン監督の『オアシス』(02年)は前科三犯の男とムン・ソリ演じる脳性まひの女との“純愛”を描いた名作(『シネマ7』177頁)だったが、まさに本作はそれを彷彿とさせるもの。また、キム・ギドク監督の『悪い男』(01年)もヤクザ男と売春婦に身を落とす女子大生との“純愛”だったから、同作とも共通点が……。

そのため、良夫が今日外出するについては、真理子の足を鎖でつないで家の中に閉じ込めたが、こんな状態でこの兄妹は生活していけるの?ちなみに、高橋英樹と秋吉久美子が兄妹役で共演した、野村芳太郎監督の『昭和枯れすすき』(75年)は、東京で二人きりで暮らす兄妹の健気ながらも問題の多い生きザマを高度経済成長時代の日本をバックとして見事に描いていた(『シネマ10』55頁)。そのため、その結末は“前向き”だったが、さて本作は……。?そんな全編を観ていると、やっぱり本作は片山慎三風!

■●知的障害をここまでリアルに!それを演じた女優は?■●

本作のチラシには、ポン・ジュノ監督の(多分自筆の)次の言葉がある。すなわち①「慎三、狂ってるよ。ホントニ……。君はなんてイカれた映画監督だ!娼婦に障害、陰毛に

人糞！？それでも映画はとて強く美しいんだから、驚いたよ。」②「今村昌平、キム・ギドク、それにイ・チャンドンの空気も感じたし、君からここまで大胆な作品が生まれるとは思ってもみなかった。良い意味で衝撃を受けたし、見事な作りだ。限られた製作費と時間の中、それにここまで危険な物語とテーマを扱ったのだから、君の苦労は相当なものだっただろうね。」

まさに、その通り。現在のぬるま湯のような、何でもキレイ事で済ませる邦画界に風穴を開けようとする本作のキーワードは、まさに娼婦に障碍、陰毛に人糞だ。そこで本当はその一つ一つを詳細に論じたいのだが、それは難しいので、まず障碍について。

本作で真理子役を演じた和田光沙は、瀬々監督の「強くなりしたい」「社会を変えたい」をテーマとした問題提起作『菊とギロチン』（18年）で、悲しい境遇の中から女相撲に憧れその一座に転がり込んできた女、花菊を演じて強烈な印象を残した女優だ（『シネマ 42』158頁）。しかし、本作では「あの役はなんと平凡だったのだろう」と思わせるほど、文字通り素っ裸で、また体当たりで、知的障碍のある女・真理子役を演じている。『オアシス』（02年）で観た美人女優ムン・ソリの、まともなセリフもなく、「アー、ウー」ばかりのセリフ（？）をしゃべり、顔面をゆがめ、手足を引きつらせ、全身をぶつけていく演技にはとにかく驚かされたが、本作にみる真理子の知的障碍の演技も、決してそれに引けを取らないものだから、それに注目！

本作が文科省から推薦されることはなく、当然R15指定だが、スクリーン上でここまで堂々と知的障碍者の“生態”をさらけ出したうえ、兄がその妹に売春までさせるとは！教育委員会が聞いたら真っ赤になって怒るのは当然だし、ワイドショーでは識者たちが「それは許されません！」としたり顔でコメントする風景が目に見えてくるが、そんな腐った現在の民主主義こそ、クソくらえだ！ここまでやり切った若手女優、和田光沙に拍手！

■□■兄は足の障碍で落ちこぼれ？この格差に納得？■□■

導入部で映し出される、“とある岬”にある兄妹2人の住居は、窓をダンボールでふさいで外から内部が見えないようにしていた。それは、家賃の催促に来る家主に居留守を貫くためだ。良夫は、悪い右足を引きずりながら造船所で働いていたが、リストラ勧告の中で嫌味を言われたため、自分から「辞めてやる！」と宣言してしまっただけ。次にやっと見つけた仕事は、ティッシュにタクシー会社の宣伝ビラを入れる仕事だが、その手間賃は1個1円だから、100個で100円。これでは兄弟2人の生活費をいくら切りつめても、生きていくこと自体がムリ・・・？。もっとも良夫には人の良い警察官の溝口肇（北山雅康）という幼なじみがいるらしいから、困った時にはそこに頼れば・・・。

そこで、良夫はある日仕方なく溝口に金の無心を頼んだが、近々子供が生まれる溝口が貸してくれたのは5,000円だけだったからアレ・・・。そこで良夫が思いついたのが、あの日真理子が1万円稼いできた、あの“売春”という仕事。そのため、本作中盤は、キ

ム・ギドク監督の『悪い男』(01年)と同じように、兄の良夫が妹の真理子を1時間1万円で売春させる何ともイヤな風景が描かれていくので、それに注目!

日本でも韓国でもマスコミは格差の広がりがかげしカランと騒いでいるが、私に言わせれば、今の日本はマルクスが理想とした共産主義社会に近い平等社会だから、この兄妹はホントに生活できないのなら、生活保護を申請すればいいはずだ。それでは映画にならないから、本作ではそういう現実的対応策を抜きにして。この兄妹の悲惨さを強調しているが、それはあくまで映画の上のことだ。そのストーリー展開中、良夫は何度も自分の右足が悪いことを呪い、そんな俺にした奴を呪い、さらに世の中全体を呪っているが、それでもこの男はどこかノホホンとした明るいところがある。私はやみくもに格差を叫び、その是正を訴えるだけの立場には反対だから、本作にみる良夫のスタンスには半分同感、半分反感……。さて、あなたは?

■■■売春からだって恋が!?妊娠は最悪だが・・・■■■

兄が妹の売春のポン引きをする情景はもちろん悲しいものだが、本作ではそれがどこか滑稽に見えるのは、松浦祐也の演技力のせい?また、知的障害をもつ真理子に売春の犯罪性がわからないのは当然だが、そればかりか彼女は楽しそうにその仕事をしているところが本作の救いだ。そうすると、ひょっとして売春からだって恋が生まれるかも……?

売春をしながら本人も適当に楽しんでいる(?)真理子に比べると、ヤクザに絡まれたり、チェンジを要求されてやむなく値下げ交渉をしたり、ポン引き役の良夫は大変そうだし、タクシー会社のチラシを真似て自ら作った売春勧誘のチラシが溝口にはれてくるとヤバイ、ヤバイ……。さらに、売春には避妊と性病予防が不可欠だが、良夫はその方面に無防備だったから、それも心配。これでは、真理子はすぐに妊娠してしまうのでは?

そんな心配のとおり、ある日良夫が真理子の尿検査をしてみると陽性だったから、アレ。これではしばらく営業停止もやむをえないし、随胎費用の捻出も大変だ。待てよ、それなら、いっそ真理子を気に入って、何度も呼んでくれているあの小人症の青年(中村祐太郎)に頼んでみれば……。真理子は彼を気に入っているようだし、彼の方だってまんざらではなさそうだ。さあ、そんなマンガ的な発想によって、良夫は青年の家を訪れ、いろいろな角度から彼なりの話法で、真理子と結婚する気はないか?結婚してくれないか?と頼んでみたが、さて彼の反応は?

■■■絶望の中でも!この電話は誰から?ひょっとして?■■■

本作であっと驚いたのは、かつての日活ロマンポルノの主演女優の一人だった風祭ゆきが産婦人科医の役で登場してきたこと。と言っても資料を観るまでそれがわからなかったのは仕方ないが、本作では、この女医が診察のため妹をつれてきた良夫に対して、「随ろします?」と事務的に質問する姿が逆に印象的だ。そこでの主要な問題は費用だが、さて今

ドキの相場は **How much?** また、それと対比されるかのように、私にはよくわからないが 墮胎手術のシークエンスが巧みなカメラワークの中、冷たく描かれていくので、それにも注目！

まあ、これにて“妊娠騒動”は何とかケリがついたから、真理子の体調が回復すれば、再びこの兄妹は共同して売春稼業に励むはず。平成の時代が30年で終わり、新しい元号が始まるにしても、この兄妹には福祉に頼らない限り何の希望もないことは明らかだ。そんな絶望の中、本作は良夫の携帯が鳴り、良夫がそれをとるところで終わる。この携帯は、行方不明になった真理子を探す時や友人の溝口に金の無心をするとき、そして売春の客からの注文が入る時等、本作で頻繁に登場していた小道具だが、その携帯にラストにかかってきたのは一体誰から？ひょっとして・・・？もし、そうなら、やっこの兄妹には一条の希望が・・・。

2019 (平成31) 年3月18日記